

いげん

の
英明

文 はらまさかず

絵 そねぼん





7

くらげ花火

73



6

子ブタのキーホルダー

64

5

吹き流し
くらげ

48

4

くらげ雲

38



3

世界一
大きな
くらげ
水族館

30

2

くらげのかさ

15

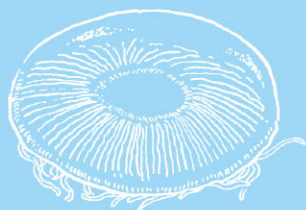
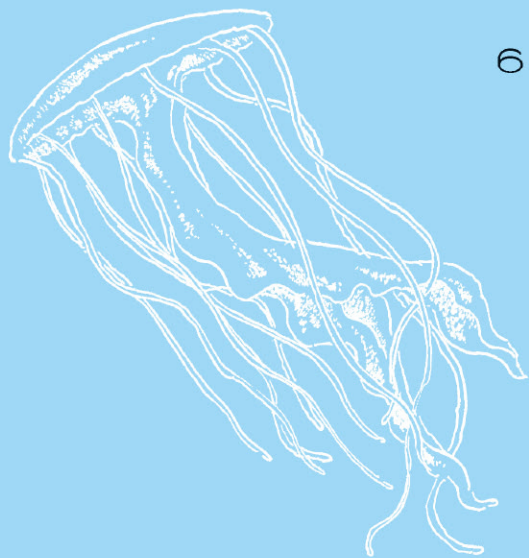
1

くらげくんの
發明

5



(もくじ)



AliceKan

Alicekan



くらげくんの
発明



ぼくがすんでいる町は、坂が多い。しかも、どれも急だ。
坂をのぼるのはたいへんだけど、坂をのぼると、海が見える。

スイミングからの帰り道、あたりがうすぐらくなってきたころ。坂をくだっていたぼくは、へんな子に出会った。

むこうから、坂をのぼってやってくる。

その子にまわりつくように、ぼんやりとしたまるいものが、いくつもうかんでいた。

ひとだま！

と、ぼくは思った。

立ちすくんでいるぼくのよこを、

その子が通りすぎようとする。

目があった。

「おぼけ？」

ぼくが小さくさういうと、

その子はクスツとわらって、

「ちがうよ」

と、立ち止まった。



Alicekan

「だって、ひとだま」

「ああ」

その子はひとだまを一つ、つかみとった。

「くらげなんだ」

「くらげ！」

その子は、それを、ぼくにむかってつきだした。

おそろおそろ、受け取る。

きゅっつかむと、それはぷにんとへこみ、ぼ

わんと、おしかえしてきた。

ガスの入った風船ではなく、プラスチックでもシリコンでもない。くらげをさわったことはない

けれど、さわった感じはたしかに、くらげ。

でも、触手はない。

手をひらくと、くらげはゆっくりうかんでいき、

ぼくのまわりをとんだ。



まるで、海のなかにいるみたい。

「どうしたのこれ？」

「発明はつめいしたの」

「きみが？」

「うん」

ぼくは、くらげをその子にかえた。

そのときだ。くらげがいつしゅん、ほわんと明るくなった。まるで火がともるみたいに、こはく色に。それを見たぼくも、なぜか心が、ほわんと明るくなった。

「ぼく、この坂さかの上にすんでるんだ。いつでもあそびにおいでよ」

そういつて、その子は、ひとだまのようなくらげを引きつれ、坂をのぼっていった。

「うん」

ぼくは、だまって見おくれた。

その子の白いシャツとくらげが、夜の町にうかんだ。

